

第29節 心境としての現＝存在

- ① 存在的な意味での気分、気持ちのことを存在論的には心境と呼び、この現象を実存範疇として考究する。
- ② 存在的な意味での気分、気持ちは通常取るに足らぬものとして扱われているが、存在論的には重要である。現存在にはいつもすでに気分があり、その気分が「存在することをその《現》(《Da》)のなかへ連れこむ」(293頁)。すなわち、心境の持つ開示の力によって、現存在は現として己の存在に直面させられる。
- ③ 現存在は実存している存在者として(実存的に)のみならず、「おのれの存在においてそれへ引き渡されているところの存在者」(293頁)として(気分的に)開示されている。現存在は日常性において大抵の場合、存在的＝実存的には気分に従っておらず、気分的に開示された存在を回避している。このことは存在論的＝実存論的には、現存在が存在的に開示された存在を回避しているという点において現存在がその現のなかへ連れ込まれた形で存在していることを意味する。
- ④ 現存在の存在は「とにかくあるし、ないわけにはいかない」(293頁)のものであり、その事実だけが露見し、由来と帰趣は隠されているものであった。この《とにかくある》という事実を、存在者の(その現のなかへの)被投性(Geworfenheit)と呼ぶ。この語はその既成事実性(Faktizität der Überantwortung)を示唆するものである。この事実の事実性(Faktizität)は、客体的な意味での事実性(Tasächlichkeit)とは異なり、現存在の存在性格(実存範疇)の一つである。
- ⑤ 現存在はいつもすでに気分的な心境において自己を見出している。これは被投性において自己を見出すということであるが、その仕方は被投性を受け入れるという形ではなく、それを回避するという形でなされている。
- ⑥ 現存在がその時々で信じている、あるいは知っている、あるいは自負しているおのれの存在の由来と帰趣によって、現存在の実存にそなわる心境において気分的に開示されている存在を説明(「明証」)することはできない。
- ⑦ 現存在は気分という存在様相においていかなる認識・意志にも先行しておのれ自身に向けて開示されている。以上の議論より、心境は現存在をその被投性において開示し、その開示はさしあたって大抵は回避的背離(Abkehr)のかたちで起こる、ということ(第一の本質性格)を得る。
- ⑧ 心境は気分により、いかなる知覚よりも現を根源的に開示する。また、それに応じてこの気分はいかなる無知覚よりも執拗に現を包み隠す。

- ⑨ 気分は世界＝内＝存在を心境においてつねにすでに全体として（現存在自身に対して）開示しており、そのことが、現存在が《……へ視を向ける》という**指向性**を可能とする。現存在の実存にそなわる心境は、世界、共同現存在、実存が同根源的に開示されていることの実存論的な根本様相である（第二の本質性格）。
- ⑩ 世界において、ない世界的なものに出会わせられるとき、それは迫られるという形をとる。この迫られるということ（Angänglichkeit）は心境にもとづいており、それゆえ、心境は実存論的に現存在の世界開放性を構成する（第三の本質性格）。
- ⑪ 心境の第三の本質性格は迫り来るものの側から言い換えれば、「迫り来るものがそのなかから遭遇するところの世界への開示的依託性」（300 頁）となるが、そうであるからこそ「感能」《Sinne》をそなえる現存在が何かに感動させられたり、何かに対する感受性を持つというようなことが可能となる。
- ⑫ 世界認識の諸規定の構成は世界＝内＝存在の心境にもとづくものである。理論的注視は世界においてあらわれてくるものを単調的な客体的存在者のように捉え、その中で分析を行わんとするものであるが、このような理論的態度においてもあらゆる気分から抜け出ているわけではない。客体的にのみ現前するものを前にするときでも、それは *ραστωνη*（自適）と *διαγωγη*（消閑）において注視しているのである。
- ⑬ ここまでの問題設定では心境の様態やそれらの間の連関を解釈することはできない。これらは存在的には情念や感情であり、アリストテレスから論じられてきた。
- ⑭ 情念の解釈はアリストテレスからストア派、そして教父神学とスコラ神学を経て近世へ継承されたが、存在論的にはこの間ほとんど進歩していない。
- ⑮ 現象学はこれらの現象すなわち情念や感情をもっととらわれない眼で見られるようにした。
- ⑯ 心境は、現存在が絶えずおのれを世界へ引き渡し、世界からの迫りを受けるような実存論的存在様相の一つである。
- ⑰ 心境はその開示性に基づいて実存論的分析にとって原理的な方法的意義を持っている。というのも、心境という実存論的根本様相をそなえる現存在の解明にあたっては、あらかじめ開示さらたものである現存在自身を解意させるというような形を取らねばならないからだ。
- ⑱ 第 40 節では実存論的＝存在論的に意義深い「不安」という根本的心境の分析を行うが、その前段階として「怖れ」という特殊な様態について次の節で実証する。